

鎌口さん(岩尾別事業場長)表彰される

～農林省創立90周年を迎えて～



表彰を受けた鎌口技官

農林省が明治14年4月設置されて、今年で90周年を迎えた。この記念式典が4月8日東京・日比谷公会堂で行なわれたが、この際、農林水産関係の各分野で功績のあった49名が表彰された。

このうち、北見支場岩尾別事業場長の鎌口憲治技官が永く辺地での不便さにも打ち克って、さけ・ますのふ化放流事業に尽力したことをたたえられ、優良職員として栄ある大臣表彰を受けた。

水産関係では北海道から唯一の表彰者で、鎌口さん本人の感激は勿論、職場の方々の喜びもひとしお、式典の帰りに本場に立寄って将来の決意を新たに、又、ふ化事業の重要さを力説された。(4月10日)

『鎌口君のこと』

石川 博

昭和20年春突然本場から至急出頭せよとの電報で、何事だろうと色々考えてみたが、見当もつかないまま場長室に入った。当時の場長は故野田信俊氏で、場長が顔を出すなり、「どうだ石川、ふ化場は存続するか廃止するか」と、いきなりこのような重要な質問を受けてハッとしたが仲々返事が出来なかった程であった。何処のふ化場の事で、どのような経過かも全く不明のためしばし言葉もなく想像ばかりしてもどうにもならず、そのような重大なふ化場は何処ですかと質問した処、「とんでもない奴だ、自分の処のふ化場がわからんか」と一喝されたのである。とんでもない

奴との一言でグッときたが、まあ落付け怒ったら負けだぞ、と自分で自分に言いきかせて場長の言葉を待った。

実の処私はふ化場の存廃については、引継は全く受けず、従って今初めて場長の口から出ただけに、場長の態度が私の勤に強くさわったのである。

しばらくして「岩尾別ふ化場についてどう思う。不便不利な処に加えて職員の希望もなく、監督すら出来ないから廃場にしたいがどうか」此の一言でふ化場の必要性に疑問が感ぜられたので、「廃場問題は私が実地見聞後にしたい、急ぐ必要もないでしょうから、

本年度中には良かれ悪かれ回答する」旨を申してサッサと切り揚げたのである。

未だ見ぬ岩尾別だけに机の上での検討ではどうにもならないだろう。戦争は増々激しくなり此のためでもあったであろう知らず知らずの内に場長との約束をスッカリ忘れて終った。そして終戦となり、あのドサクサの中で考える余裕もなかった。その年の12月の声も近い或る日、支場の玄関に一人の若者が立って、是非ふ化場で使ってほしいとの事、とりあえず私の室で話した処、復員の海軍兵だった事と、ふ化場には些か認識があるとのこと。此の際は是非岩尾別ふ化場で使ってほしい旨でこれには少々驚いた。そこでふ化場は立派な技術官庁でありその技術の修得は容易でない事を色々説明したが、「是非その技術を修得したいし、如何なる困難も平気である。戦時中の事を思えば死んだ気になって働けます」とハッキリした態度で申した若者一、此れが現在岩尾別事業場長の鎌口憲治君である。使役するしないは別として、当分宿直室で自炊する事として、彼の支場生活が始ったのである。海軍で鍛えただけあって、何事にも几帳面で、しかも清潔屋である若者だった。捕獲採卵事業は既に終って、採卵技術の実習は出来なかったが、折りにふれふ化事業の一般を説明して過した。彼は日課のように、毎朝出勤時間前からよく働いて、そこで終戦後初めての新年を迎えたのである。3月に入ってから急に野田場長との約束を思い出して、年度内には何とかしたいもの、それに都合良い事には鎌口君が居る事だし、また、彼の父親は岩尾別の開拓部落に居住している。「よし、どうぞ岩尾別が廃場になるのならば一度も現地を見ないで決定する程残念な事はない。」3月も中旬過ぎてから岩尾別ふ化場行きを決め、鎌口君に話した処、彼の喜びようは大変なもので早速彼の案内で出発する事にした。彼の説明だと斜里町から約60km徒歩一点張りである事と「途中が誠に困難な処が多いのが特徴

で、何事も一見にしかずですよ」と笑っていた。

斜里町の宿を朝早く出たが、鎌口君が「一寸待って下さい」と一人の男を連れて来て紹介してくれた。此の人は岩尾別に居住する町会議員で、丁度議会が終ったので同行するようお願いしたとのことである。此の人は本田正雄さんで、陰になり日向になって岩尾別ふ化場の再開に尽力されて居た人であった。丁度此の日は議会も終ったので風邪気味のため、2、3日休養してから帰る予定だったが、「私が岩尾別に行く話を鎌口君から聞いたので風邪等で休んで居られなく是非同行してふ化場再開に」と、誠に異常な意気込みで熱があるのもかまわず私のリュックを背負って歩き出したのである。

旅程の半分以上は山の中を歩いたが、愈々これからウトロ迄は海岸といっても海の中氷上である。先頭になった本田さんは氷上の道案内であった。歩き乍ら岩尾別の開拓状態とか、部落の子供達の教育問題、はては社会問題等色々話した乍ら、「此のような立派な人に再開を考えてもらっているふ化場は実に幸福だな」と思った。

本田さんは右は危険だから左を歩くよう又左はだめだから右をと、氷上の道案内は3月下旬ともなれば大部薄くなって危険が多く大変らしい。部落の人々は氷が張りつめるとこれが唯一の歩道で、山道で雪の中を歩くよりも楽だというのである。沖の海が見えない位に氷が張りつめている其の上を歩いている私は、めくら蛇におじずで私の歩き方に本田さんは随分気を使っていたようだった。漸くウトロに着いてその晩は駅通泊りとあってわざわざ案内してくれる。

翌朝鎌口君の案内で宿を出た。昨日は氷上今日は愈々山道で此の遠景は実にすばらしい。遠い山々の雪中には大きな青木が各所に見られて全く墨絵一幅とはこの事だろう。鎌口君曰く、「此の遠い眺めは何時見ても清々しい

気分になり何ともいえませんよ。」全くその通りの遠景である。「此処が見返り峠とってヤレヤレと腰をのぼして、今来た道をふり返って一服する処で此の名称があります」という。左は遠く海が見え、水平線まで氷が張りつめて白一色とはこの事だろう。このような雄大な景色を見られるなんて恐らく他所では到底見られない風景であろう。歩いている雪の下は道路だろう。そして左右には斧の全く入らぬ大木が続いて、夏になったらきっと鬱蒼とした林道であろう。鎌口君が、「今は雪があって見透しはきくから良いのだが、雪が消えて春になると愈々山の親父の出没となって仲々油断は出来ませんよ。此の崖を下りるとふ化場はすぐですよ」といって小走りになった。「此の崖の左右にも大木が斜めになったり倒れていたりで椎茸でも出そうだな」と云ったら、「此の木には沢山出来ますよ、それより秋になると葡萄、コクワの実は取り放題で、山の親父が出るのは当然ですよ」と、全くひとごとのように軽く云うのを聞いて、「岩尾別ふ化場を守るのは此の男では？」とチラッと頭の中を走る。岩尾別川に沿って少し遡ると道路の片隅に大きな岩があり、ふ化場は目の前だ。やれやれやと着いたのだ。養魚池は雪のため大部破損が甚しい。職員の居ないふ化場から破損するのは当然だろう。ふ化室は1000万粒収容分の広い室で、さすが当時原始林の中から選んだだけに立派な材料が使われていた。ふ化槽が二列だけあって、鮭卵が言い訳のように僅かに収容され、残りの槽は全部室の片隅に積んである。ほんの僅かの鮭卵は全く形式的な数を見せてふ化盆に並べられている。これは捕獲委託者の代理として、漁夫が採卵してその卵を収容する由で、時々ウトロから卵とふ化用水を見に来るだけらしい。従って卵や稚魚等をどう処理しているのか全く不明である。

発熱を冒して案内してくれた本田さんは、川向いの自宅で今日はゆっくり床の中で静養

している。「鎌口君の処には未だ何の用意もないから、私の処に泊ってくれ」との事なのでその夜は本田さん宅に厄介になる。本田さんはまあ今晚はゆっくり休んで、明日は開拓部落や其の他を鎌口君が案内するだろうからと語る。



私は31日には支場に帰る予定だったので先を急いでいるが、鎌口君の父親に会って見ると大変な話し好きで開拓の苦勞話を聞かされた。「息子（鎌口君）が復員して来たが、こんな人里離れた開拓地ではどうにもならない。鮭や鱈が沢山獲れる海をひかえて、立派なふ化場があるにもかかわらず職員は誰も居ない。建物は腐るばかり、出来たらふ化場で働いて見ようかと息子が云い出したので、此の事を本田さんに相談して見た。処がふ化場は役所のものであるから、役所に話してからでないとだめだろう。そういえば北見市にふ化場があるとの事だったので息子が御話しを聞きに出頭したようなわけです。」

私は当地に来た事を簡単に説明して、「今の処は返事の仕様もないので、帰場後本場とよく相談して」と早々に切り上げて本田さん宅に帰る。元気になった本田さんは、「是非今晚もゆっくり泊ってくれ、実は此の部落では近くにある小学校で明日集会がある。これは常会といって毎月開いているが、是非出席してふ化事業の話しをしてもらいたいのぞ」と頼んできた。此処まで来て独りで支場へ帰るわけにもゆかず出席することにした。

常会は午後1時からで、幸い午前中は体に暇があるので、鎌口君の案内で近くにある温泉に出掛ける事にした。温泉は小屋と浴槽が離れていて、河原に木槽がうめられてあるだ

けで、全くの野天温泉風呂である。少し微温湯であるが湯につかっているとだんだん温まってとても気持ちが良い。鎌口君の説明では、「当地は地熱が高いので年に2回も馬鈴薯の収穫がある程で、此の地熱の高いのは近くに見る硫黄山の関係だろう」という。河原のアッチコッチに雪が残っているが、私達は河原で真裸であってもちっとも寒いとは感じなく、矢張りこれも地熱の高い為であろう。温泉にも入れたので本田さん宅に帰ったら、部落の人々は学校に出掛けたとの事で私達は急いだ。

部落常会もふ化事業の話も終わったところで、代表が次のような話に移っていた「ご承知のように網走養殖水産組合で立派なふ化場を建てて益々鮭や鱒が増えるようにと考えたのですが、ご覧の通りふ化場の職員は退職したままふ化場を守る者は誰もなく、ウトロの漁師が魚を獲ってそれから僅かばかりの卵を採卵してふ化室に入れ、時々見廻っているような有様で、魚は増える処か漁師は魚を獲るばかりに一生懸命になって今日に至っております。聞くところによりますと、ふ化場を守る希望者はないので、数年前から休場となり又今度は廃止になる噂ですが誠に惜しいものだと思います。それで廃場になるならば、そ化場を是非私共にご貸して下さい。ご指導によって立派にふ化場を守りたく、此の事は常会で全員が賛成したところですよ。」

このような事に対して私は返答に困った。「役所としては貸すような事は出来ませんし、若し役所が事業を継続するような場合は、一番重要な事は何と申しても地元の方々の労力が必要となるでしょう。私は帰って詳細報告してからその結果をお知らせする事にしましょう。」と言ったら全員は、「若し役所で継続するような場合は、労力なら喜んで吾々が提供します」と大変な意気込みであった。

一同と別れてすぐ帰り仕度である。「今日中に行ける処まで強行する」と本田さんに話して厄介になったお礼を述べて岩尾別を後に

した。勿論鎌口君と一緒にいる。彼は常会でこの事には一言もふれないが何か考えているようだなとは思ったが、私からは何も聞かずに「今晚はどこに宿を取ろうか、斜里返はどうしても行けないな」と言うのと、漸く彼は口を開いて、「どうも天候は怪しくなりました、ウトロの駅通で一泊して明朝早く立つ事にしたらどうですか。駅通の主人は今一度話しが聞きたい等と申しておりましたが、夜道を歩いても良いがどうも天候が心配ですから。」

駅通主人の話では「どうもこのような不便な処であり、第一毎日の生活にも今の状態では見透しがないので、便利な町にでも移ろうかと思っております。」此の一言で私は些か落胆した。それでも私は、「出来るだけこの土地を購入しておく事ですよ。何としても土地の確保だけでも忘れぬようにした方が良いと思う。此の大宝庫の魚田に必ず人々が入って来ますよ」と言って、明日の旅を考えて早目に床についた。夜中に雨の降るような音で眼が覚めた。たしかに雨である。「どうか此の雨は朝になったら晴れますように」と祈り乍ら又眠ってしまった。

鎌口君の声だ。「珍らしく今頃雨になるなんて今日の旅は到底見込みがないようだな。」愈々滞在かとガッカリする。雨の間に鎌口君が何処かに出掛けたようだった。空模様で心配で部屋から出たら、廊下に大きな鍋がある。彼が帰ってきて、此の雨ではどうにもならないので退屈まぎれに鶏のダシでソバを用意しましたが時間が少々経ったので、早くたべないとびてしまう。」とすすめてくれた。ソバは少しのびてはいたがそれでも二人は腹一杯食べた。

翌朝は前日の風雨がウソのように快晴となって、足が軽く先を急いだ。岸から沖一杯に張りつめていた氷は2日間の風雨で何処に消えてしまったのか青い海の色が目にしみる。岸の所々に氷塊が折り重って山のようになりそれに午後の陽が当たって只綺麗だなあと口に

出た程、実に見事な自然の造作であった。

岩尾別の人々と話したり、雨に会ったりの旅であったが、年度末ぎりぎりに帰場が出来た。

野田場長との約束もあり、桜鱒の重要地点としての岩尾別事業場を再開すべきである事、建物は充分使用に耐える事、ただ養魚池は雪のため一部が破損している事等詳細に報告すると同時に、重ねて鱒資源のため再開を強調した。

このことが かけになって、正式に岩尾別事業場再開と同時に鎌口君の採用も決定されたのである。事業場を守る鎌口君もさることながら岩尾別の本田さんの喜びようは如何程であったろう。私もこの喜びで60km を往復した疲れも何処かえふき飛んだ程であった。

鱒資源を岩尾別川のふ化事業にかけて、当時網走養殖水産組合が昭和12年に新設したふ化場であったが、数年で休場の止むなきに至り、加えて廃場という誠に重大な線をふらふ

本年5月に当場のさけ・ます人工ふ化や漁業の状況を視察したアントニー・ネットボーイ氏（アメリカ）の感想が本国の新聞記事にのせられ、これがアメリカ

ら足で只立っていた岩尾別事業場が、やっと再開となり、「しかも全道一の鱒ふ化場にするぞ」という新しい意気込みで事業場を守る鎌口君は、実に悲壮な決意であった事が窺がわれるのである。そして20有余年の間、鎌口君は全く鱒資源の向上に命をかけたと言っても過言ではないだろう。或年は事業にあせりも出た事もあったであろうが、よく頑張り通したものだと思ふと彼の意気と誠意には頭を下げざるを得ない。長い20有余年間は実に茨の道であったろう。親魚の蓄養については彼の新しい構想で立派な成績を挙げ、これでもかこれでもかと来る年毎に鱒と張り合った。そして遂に鎌口君に凱歌が上ったのである。あの不利な所に理想的な立派なふ化場が改築され、旧小学校の跡に移転されたのである。正に岩尾別事業場は鎌口君と共に成人したのである。

彼の長かった努力に心から敬意を表し将来共益々繁栄されるよう祈るものである。

(札幌市白石北郷)

大使館を通じて、先頃寄せられた。

なお同氏は「大西のさけ・ます」の著者で、オレゴン州ポーランドに住む、さけ・ますの研究者である。

天然生産を断念

日本人はさけ・ますの人工孵化はより容易であると見ている

アントニー・ネットボーイ（訳：五十嵐）

札幌発一我が国の太平洋の北西地域などでは、河川のさけ・ます資源生産に当って、天然生産に補充するために孵化場で生産した稚魚を放流し資源維持を図っているが、日本では天然生産を維持しようとする意図を事実上放棄している。日本では、彼等が懸命になっている水産増殖の一つである「さけ・ますの人工孵化」と呼ぶ方法で専ら行っている。

日本には約65ヶ所のさけ・ますの孵化場があり、内40ヶ所は北海道に、他の25ヶ所は本州にある。大規模な北海道の機構の中心はポートランド市と姉妹都市を結んでいる札幌にある。担当している職員達は組織の運営について、進んで説明してくれ、何ヶ所かの孵化場、捕獲場又事業河川と呼ばれる川を案内してくれた。漁獲されるものの大部分はさけ（シロサケ）で成熟したものでは9～10ポンドに達し、海から浜上してきた時には非常に美

味である。（略）

さけは北海道では160河川に産卵浜上するが、人工生産用としては約60河川で捕獲される親魚を使っている。これ等の河川の殆んどは短いものであって50km（30マイル）以下である。十勝川や西別川（私が訪ねた川）の様な2、3の河川では10万～20万尾の親魚が浜上する。これらの親魚は海からそれ程遠くない捕獲場で捕獲され、採卵受精される。この卵は捕獲場に近接しているか或は何マイルか上流にある孵化場で孵化する。極く少数の河川では、さけが天然産卵している。

私が3月の或る寒い風の強い日に訪れた釧路事業場は収容能力4千万粒の日本でも最も大規模なものの一つであって、年間約3,200万尾の稚魚を放流している。そこは釧路川の源流部にあつて、その用水は数ヶ所からの湧水が引いており、非常に清澄で飲み水に使う